

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2024年(令和6年)
5月5日 第732号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2023年11月29日開催 図書室のつどい「ファッションを彩る革製品の“裏側”」参加者の声〉

ジャパンブランドの皮革が、
再びファッションを彩るときはにゅう
羽生 伸子

皮なめしの作業をする男。一枚の原皮を川に浸した後、獣の表面の毛を気持ちいいくらいにこそぎ落としていく。「白なめし革」の一連の作業がスクリーンに映し出される。

今回の講師である西村祐子先生は、皮革への愛情が溢れ出さんばかりに滑らかに解説していく。

市川という姫路にある河川のバクテリアが程よい腐敗を起こし、脱毛を手助けするのだという。白なめし革は、塩と菜種油を用い環境にはやさしいが、天日干しと足揉みを何度も繰り返し、大変な労力と途方もない時間を要する。千年以上の歴史を持つ日本独自の白なめし革は、欧州の職人たちを唸らせたほどの代物だったと聞く。しかし、この手法も大量生産できる機械化の流れや被差別部落の解放等によってやがて衰退の一途を辿る。

この会に参加した私は、実は皮革と被差別部落についても学びたいと考えていた。かつての同和教育を受けた世代の私が、一端の歴史しか知らないのだと痛感したのは、西村先生の近著『皮革とブランド』(岩波新書)を読んだからである。

日本では皮革業に従事していた人々が「皮田」と呼ばれ、世界の皮なめし職人たち同様、動物の血の穢れから卑しい仕事とされてきた。しかし、なめし職人の手によって、獣の「皮」から私たちの生活の必需品である「革」へと変換される。西村先生は、皮なめしの作業がなければ、私たちの文化的な生活が為されないと強調された。では、世界各地で脈々と皮なめし技術を継承してきたユダヤ人や南インドのムスリム、東南アジアの華僑である「客家」と呼ばれる集団はなぜ生き残ってこられたのか。技術はもとより、人々が彼らの必要性を理解し、何よりも職人としてリスペクトしていたからだと思うのだ。

今、高級ブランドバッグを皆がこぞって持つ。西村先生の同著にも、ブランドバッグのこと、アウトローやアナークの象徴である黒の革ジャンの話や、高級ブランドを纏うヒップホップやラップミュージシャンが今どきのアイコンだとある。私が最もワクワクした件である。黒の革ジャンといえばコムデギャルソンの川久保玲を彷彿とさせるが、81年のパリコレで「ボロルック」という真っ黒で穴の空いた加工とアシンメトリーなデザインを引つ提げて、それまでのエレガントな、そして退屈なスタイルをぶち破ったことが思い出される。ファストファッションのせいだろうか。この頃、日本のファッション業界は元気がない。

先ごろ、高級ブランドバッグのルイヴィトン(LV)が日本の西陣織と岡山デニムのサプライヤーと提携したというニュースが飛び込んできた。長い歴史を持つ、日本の高い技術が認められることは喜ばしい。いまだにイタリアの皮革は根強い支持を得ているが、ジャパンブランドの皮革は残念ながら世界に飛び出せないままだ。いつか、LV、エルメス、グッチのように日本の高級ブランドが流通する日が来るだろうか。皮なめしの話をするときに、すぐに貴賤の話に集約してしまうのは、もうやめにして、かつて日本のファッションがキラキラして、カッコよかった時代のことを語りあおうよ。会が終了すると、夜の帳を歩きながらそんな思いが湧いてきた。

西村祐子著『皮革とブランドー変化するファッション論理ー』(岩波新書)、『皮をつくる人びとー被差別部落、客家、ムスリム、ユダヤ人たちと「革の道」』(解放出版社)

ブッククラブから

あとがきー知る喜びとブッククラブー

東 健太郎 (文学講座連絡会編集委員会)

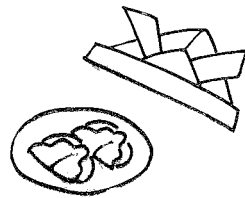
二〇二三年度くにたちブッククラブの文集は、講座参加者の感想を中心にまとめられています。ここでは東健太郎さんが書いてくださった「あとがき」の文章を紹介します。

このブッククラブに参加して3年が経ちました。毎回 (24 回連続) 出席して、徐々に慣れてきたかな、という感じです。

当クラブは、カルチャーセンターなどと違い費用がかからない上に第一線の研究者の解説が聞ける、という点が非常に大きな魅力となっています。

47 年の伝統があるというのも驚きで、課題作品選定に至る手続きも民主的であり、読書会当日の進行ルールもよく考えられていて、これまでの経験が生かされているのだろうと思いました。

いつも当日の1週間前から集中モードに入り、課題図書及び関連書籍を読み込み、インターネットなどを通して情報収集しつつ感想を練り上げていくのですが、この作業が何より楽しいです。まさに至福の時と言えます。そして、会当日は1週間の成果を数分間に凝縮した形で発表するのですが、今やこれが生きがいとなっていますので、より一層注目していただけると嬉しいですね。また、



文集できました！



文集をお読みに
なりたい方は
公民館図書室まで
お越しください。

他の会員の方の感想や講師の解説を聞いて新たな視点に気づくことも多く、まさに知る喜びを実感しています。

今、47 年というブッククラブの歴史の中に私たちはいます。この歴史は、図書室利用者と公民館職員が、カウンター越しで本の読後感を語り合いたいと会話したことからは始まったそうです。自治体の事業は横並びが多いですが、市民と担当者の会話から生まれたこの事業は、他に類例を見ない存在となつて今に至ります。利用者の要望をこのような形にしてくれ、そしてそれを継続発展させてくれた歴代の担当職員の方には感謝しかありません。

年齢も、性別も、これまで生きてきた背景も異なる人々が、同じ小説を読んで感想を述べ合うということは、この私たちが生きる世界においても稀な機会と言えるでしょう。職場でも、家庭でも、友人同士でも話題には出せないことが多いでしょうから。

この稀で楽しい機会を私たちだけで独占するのはもつ

たいないとも言えます。もつと多くの人にこの喜びを味わってほしいです。近隣であれば、誰でも参加可能ですので、お気軽にどうぞ。

これまで、どれだけ多くの会員が、文学作品を通して生きることの意味や知る喜びを感じてきたことでしょうか。累計すれば数百人に及ぶでしょうか。そして、その声は過去の文集を開けば聞くことができるのです。最初の文集は「この一冊」というタイトルで、1985 年に発行され、原稿は手書きでした。公民館図書室で創刊号以下数冊を読みましたが、まるでその会員が目の前にいて肉声を聞くかのごとくでした。文集を読む時、読み手と当時の会員は時空を超えて一緒に存在しているとも言えるでしょう。

今回も、今を生きる私たちの声を文集に刻むことができました。ぜひ、手に取ってその声を聞いていただければ嬉しいです。

くにたちブッククラブ

一たしかにそこにいた「わたし」のことー

井戸川射子『ここはとても速い川』
(講談社文庫)

講師 山岸 郁子
(日本大学・日本近代文学)

とき 5 月 9 日 (木)
夜 7 時半 ~ 9 時半

ところ 公民館 3 階講座室

申込先 公民館 ☎ (572) 5141

* 5 月から、8 回にわたり様々な文学作品を味わう「くにたちブッククラブ」が始まります。年間予定など、詳しくはホームページをご確認ください。



新着図書から

昆虫カメラマン、秘境食を味わう

山口進 (集英社インターナショナル)

十二支外伝

福井栄一 (工作舎)

〈自然科学〉

はまると深い! 数学クイズ

横山明日希 (講談社)

13歳から考えるハンセン病問題 江連恭弘 (かもがわ出版)

〈工業〉

もう木を伐らないで

高槻成紀 (彩流社)

〈産業〉

温泉旅行の近現代

高柳友彦 (吉川弘文館)

〈芸術〉

黒沼ユリ子の「おんじゆく日記」

黒沼ユリ子 (金曜日)

ともに生きるための演劇 平田オリザ (NHK出版)

映画は子どもをどう描いてきたか

佐藤忠男 (岩波書店)

〈文学〉

文学が裁く戦争

金ヨンロン (岩波書店)

古典モノ語り

山本淳子 (笠間書院)

紫式部女房たちの宮廷生活

福家俊幸 (平凡社)

月の立つ林で

青山美智子 (ポプラ社)

大江健三郎同時代論集

大江健三郎 (岩波書店)

つぎはぐ、さんかく

菰野江名 (ポプラ社)

の、すべて

古川日出男 (講談社)

小さな命の帰る家

松原宏樹 (燦葉出版社)

オール・ノット

柚木麻子 (講談社)

ペイント

イ・ヒョン (イースト・プレス)

別の人

カンファギル (エトセトラブックス)

ガラスの帽子

ナヴァ・セメル (東宣出版)

滞空女

パク・ソリョン (三一書房)

お城の人々

ジョーン・エイキン (東京創元社)

図書室で読める雑誌

〈月刊誌〉

中央公論

文藝春秋

東京人

世界

婦人公論

婦人之友

母の友

教育

月刊公民館

月刊社会教育

社会教育

月刊福祉

きょうの健康

栄養と料理

芸術新潮

&プレミアム

キネマ旬報

音楽の友

山と溪谷

本の雑誌

現代詩手帖

新潮

図書

ちくま

未来

〈週刊誌・週刊紙〉

AERA

週刊文春

週刊新聞

週刊読書人

〈その他〉

サライ (月2回刊)

ふえみん (月3回刊)

明日の友 (隔月刊)

くらしと教育をつなぐWe (隔月刊)

暮しの手帖 (隔月刊)

多摩のあゆみ (季刊)

Chioちいさい・おおきい・よわい・つよい (不定期刊行)

〈外国語新聞〉

東亜日報 (ハングル)

人民日報 (中国語)

ジャパン・タイムズ (英語)

〈外国語雑誌〉

新東亜 (ハングル)

青年文摘 (中国語)

読者 (中国語)

タイム (英語)

ひらがなタイムズ (日本語と英語)





Q. 公民館図書室の開室時間は？

A. 午前 9 時～午後 5 時（水曜日・土曜日は午後 8 時まで）
祝祭日は、休室日をのぞき、午前 9 時から午後 5 時まで開いています。
【休室日】月曜・年末年始・蔵書点検期間

Q. 国立市内の他の図書館で発行した図書利用カードは使えますか？

A. 使えます。国立市内の他の図書館と共通のカードになります。

Q. 国立市内の他の図書館の本を公民館で受け取れますか？

A. 国立市に在住・在勤・在学の方は、本を予約していただいた際に受け取り館を公民館に指定していただけます。

Q. 図書利用カードを新しく発行したい。またはカードの有効期限が切れてしまった。

A. 国立市に在住の方は窓口へご住所を確認できる書類をお持ちください。国立市に在勤・在学の方は、ご住所を確認できる書類に加え、在勤・在学であることを証明できる書類をお持ちください。その他、国分寺、府中、立川、日野市民の方にも図書利用カードを発行できます。



■ 詳しくはお問合せください。

公民館図書室では、公民館で実施している講座の参考となるような本を揃えています。現在実施している講座の参考図書コーナーなどもありますので、ぜひご利用ください。



〈私の本棚から 第2回〉

ヘンリー・ジェイムズ著

『荒涼のベンチ』

鍛冶勝



夏目漱石が、遺作『明暗』を執筆するうえで、お手本とした作家が、ヘンリー・ジェイムズです。ジェイムズの長編『金色の盃』（講談社文芸文庫）は、漱石の蔵書にあり、原著に書きこみがあったことは知られた事実です。それまでの作品とちがひ、人物の心理描写に多くのページをさいた『明暗』の漱石と、細密な心理分析が持ち味のジェイムズの主要作品が、シンクロします。作家は、すぐれた作家から養分を奪い、自作の血肉とします。換骨奪胎、一流の芸術が、新しい芸術を産む母体となるのです。推理作家のアガサ・クリステイは、「どうしたら、小説家になれますか？」―読者の問いに、「あなたがいいと思う作家を真似しなさい。真似をして、技術を盗み、模倣がとれたと思ったら、編集者に見せるのです。もしあなたに才能があれば、あなたは小説家になれるでしょう」と答えたとか。さて、人間の心のひだにわけ入る、心理分析の手法を駆使して、一世を風靡した、ヘンリー・ジェイムズの代表短篇『荒涼のベンチ』です。結婚の約束までしておきながら、一方的に婚約を破棄した男。婚約をとり消された女性は、裁判沙汰にしないかわりに（婚約不履行で訴えないかわりに）、400ポンドの慰謝料を払うよう、ロンドンの弁護士事務所を通じて求め、二人は契約をかわします。

古書店を営む男は、全財産を投げ打っても、400ポンドという大金はつくれません。やむなく男は、人生のすべてだった店をたたみ、全額、慰謝料にあてます。それでも、契約の400ポンドにまだ足りません。人生の目標を失い、落ちぶれていく男。貧乏にあえぐ男は、その後、結婚した妻と子を、その困窮ゆえに失います。妻子は、貧困のどん底で死んでゆきます。

そして十二年後の今、孤独な中年男となった、生ける屍の男の前に、かつての婚約者が現れます。なぜ？ 十二年もたった、今になって？

真綿で首をしめるように復讐される男の心理描写は凄惨です。あわれみさえ覚えませんが、それも作者ジェイムズの計算のうち。最愛の男性に裏切られ、もつと苦しんだ元婚約者の真実の叫びに、読み手が気づくのを遅らせる、心憎いばかりの仕掛けとなっています。「あした五時私のところにお茶に来てくださいとお頼みしていいでしょうか。（大津栄一郎訳）―男の払った慰謝料で、富裕な淑女に社会的上昇をとげた元婚約者の、まっすぐな想い。作者ジェイムズは、すべてを失った男の苦悩を、一つ、一つ、解き明かすことで、エンディングまで光の当たらなかった女性の魂を、逆照射し、物語を昇華させました。

息づまる男女が放つ、セリフの応酬。刻々にうつろう、現在進行形の愛と憎しみが、ラブ・ストーリーを解くカギとなります。まだゆれ動く、人の心をペンに映す「小説の印象派」は、文庫にして、わずか93ページの短篇で、みごとに表現されています。

『ヘンリー・ジェイムズ短篇集』岩波文庫所収）